

季刊 史料と伊能図

伊能忠敬

研究

一九九九年春季 第十九号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 (仏) イブ・ペイレ氏蔵 最終版中図・関東(部カ)

フランスのペイレ氏が所蔵する伊能中図八枚揃いの関東図の部分である。太い線が測線で、縦横に走る細い線は方位線である。測線として江戸から北西に延びる街道が幾筋も描かれている。これらは、西国測量の往復を利用して測量された。四次測量以降はすべて西向きで東向きには測っていないので、東側には測線が少ない。奥州街道、岩槻街道、中山道、川越街道、甲州街道などがはっきり描かれている。

●は郡界、☆は天測した場所、△は寺院、□は城下、○宿場、ハは神社、♢湊である。ひととおり揃っている。経緯線は測線の間の隙間まで忠実にえがかれている。

埋め立ての部分がないので東京湾が広く感じられる。沿岸に沿って測量された荒川は詳しいが、測量されなかった中川の上流はボカされている。

ペイレ図は若干傷があるが描画の完成度が高く、中図のなかの優品である。

(渡辺)

〔題字は忠敬の筆跡〕

目次

(表紙写真解説) 目次

巻頭エッセイ

グローバル時代から伊能忠敬をみる

野々村邦夫 1

伊能ウォーク報告

伊能ウォーク本部隊の一日

渡辺 一郎 2

常陸路北上参加記

窪谷悌二郎 4

陸前浜街道

福田 弘行 6

史料紹介

芳名録より

伊能 洋 9

第四次測量における加賀藩測量の実態 二

河崎 倫代 10

伊能家文書紹介 十二

●二人の師 高橋至時と間重富

安藤由紀子 16

●臼杵あたり

伊能 陽子 20

伊能古文書教室

伊能豊秋日記 一

小島 一仁 24

研究ノート

歴史のなかの伊能忠敬 四

●草圭記

芳賀 啓 28

関西支部通信 一

原田 照男 30

ご寄付御礼・お知らせ

31

ニュース速報・編集後記

33

(裏表紙) 英文目次

グローバル時代から伊能忠敬をみる

野々村 邦夫

先頭を行く「御用旗」は、伊能忠敬の測量が、幕府の事業であることを証明した旗にちなんでいる、と朝日新聞の記事は伊能ウォーク（平成の伊能忠敬「ニッポンを歩こう」二十一世紀への百万人ウォーク、伊能忠敬研究会ほか主催）が行進する様を伝えている。そのとおり、伊能の測量は、幕府という中央政府による、各藩の枠組みを超えた国家事業だったのである。

現在、国家の事業として全国規模の測量を行っているのは、我が国では、国土地理院と海上保安庁水路部である。国土地理院は陸域の、水路部は海域の測量を行い、それぞれ、地形図、海図などの基本的な地図を発行している。両者に共通することだが、最近のそれぞれの業務の特徴のひとつは、それが領土領海という枠を超え、地球規模（グローバルスケール）で行われていることである。例えば、GPS（汎地球測位システム）というのは、人工衛星を利用する精密な測量技術であるが、国土地理院は、その精度を確保するため、先進各国と協力して人工衛星の軌道解析を行っている。また、VLBIという技術は、電波屋からやってくる微弱な電波を同時観測して、遠く離れた地点間の位置関係を精密に決定する技術であるが、国土地理院は国内でこれを行うのみならず、米国、オーストラリアなどと共同観測を実施している。この結果、地球の形状がより正確に分かり、地球規模の地殻変動が観測できる。さらに、地球全体を約一キロメートル間隔に区切り、標高、植生、土地利用、水系などのデータを統一した仕様で整備しようという地球地図プロジェクトを我が国が提案したところ、多数の国々の賛同を得た。国土地理院は国内のデータを整備するだけでなく、東南アジア諸国の地球地図データ整備にも協力している。

伊能図には、朝鮮半島の山々が描かれている。北海道（蝦夷）から屋久島まで、幕府の旗の下に各藩の枠を超えて全国を巡り、対馬の北端から朝鮮半島を遠望した伊能忠敬の心は、国境を超えていたであろう。それから二世紀近くが経過した。彼のような世界に通用する偉大な測量技術者を輩出した国の国家測量・地図機関が、自国のためのみならず、地球と人類のために地球規模の事業を実施することは、それほど不思議なことでもなく、自慢することでもなく、むしろ当たり前のことであり、やらなければならないことと言ってもよいのではなからうか。

（ののむら くにお・前国土地理院長）

伊能ウオーク本部隊の一日

渡辺 一郎

夕食会場に行くと、明日の予定が掲示してある。朝食六時三〇分、出発七時。こりゃ大変と目覚時計を五時三〇分にあわせて床に入る。

翌朝定刻六時三〇分に玄関に降りると、わが新沢学芸員はもうトラックを横付けにして、隊員の荷物を受け入れている。

彼のワイドかつロングボディの二トン車は、大会会場に張るテント三張り、大会グッズ、大量のパンフ、横断幕、謹呈用御用旗、大会帽子、伊能教室用パネル三〇枚、量程車模型、小象限儀、など運営資材を満載した倉庫である。

多少残る空間に隊員の私物を積んで朝出かけ、出発会場で最後まで残って用品を積む。到着地に先行して宿舎に私物を降ろしてから到着式場の市役所につけて待っている。伊能教室を開くときは教室器材を開催場所に降ろして展示を行う。

みていると隊員の私物は意外に多くて、形は旅行ケース、バッグ、紙袋など様々だが一箇という人は少ない。私物を積み込んでから朝食である。この日は和洋バイキングなので、みな喜んでいた。旅館だとパンが食べられないのだという。

七時過ぎに出発。大庭会員の七人乗りバンで会場へ隊員をピストン輸送する。新沢君のトラックは先発して、会場ですでに用品を降ろしていた。

会場では先に着いた者から準備を始めている。テーブルを並べる、グッズを袋詰めする、看板を立てる、などである。受け付をはじめ、

当日の参加会費を受け取る。ルート地図を百円で売る。馴れたもので自然に仕事の流れがゆく。ほんとに本部隊だと思う。

出発式。副隊長が司会して、来賓挨拶、隊長挨拶、コース説明、機体操と順調に進んで出発となる。参加人数は、少ない日で百名くらい、多い日は四百名くらいである。大会の日には千名に近づく。

先頭は地元の歩け歩け協会のコースリーダーと副隊長。副隊長は参謀を兼ね行進中のすべての連絡調整を取り仕切る。つぎが隊長とゲスト(例えば市長)、伊能ウオーク本旗、本部隊旗、交通安全旗、伊能ウオーク旗、などを持つ本部隊先頭グループ(日により交代)が続く。会場出口では、アンカー役の本部隊員が二人で人数をカウントしている。この人達は赤いタスキをかけ、カウントを終わってからアンカーとなって隊列の最後を歩くのだ。アンカーはたいへんだ。十分実力がないとつとまらない。遅れた人達を励ましながら一緒に歩いてゆく。あまり隊列が離れると、先頭の副隊長と連絡して、隊列をとめ列を詰める。無理な人は随行車を呼んで乗せる。本部隊はこれまでしっかり歩いてすっかりベテランなので、隊列の統制をしながら皆で歩いて行く。

そのうち、アンカーから参加人数の報告が隊長のもとにはいる。隊長は副隊長と協議して見送りの人数などを加えて、正式参加人員とする。事務局、朝日新聞の県版などへ通報され、その数字が夕刊の紙面に登場する。

到着場所では市長が訪問記念の伊能図巻物に署名するため待っているし、途中、小学生の歓迎とか、湯茶接待も準備されているから、歩行はなるべく予定通りが望ましい。途中の経過地と予定時間は、刻々歓迎側の責任者と連絡をとりあう。隊列があまりくずれては歓迎チームに申し訳ないので、歓迎チームの近くでは隊列の整頓もおこなう。

条件が一定でない多数のウォーカーを引っ張ってゆくのはなかなか大変なことだとおもう。まず、自分に体力がなければならぬし、場面ごとの確な判断が求められる。携帯電話がなかったらこうはうまくはゆかないだろうと思う。

出発会場に残った新沢、大庭隊員と荻野隊長補佐、朝日事務局は横断幕などすべての荷物をトラックに積み込んでから出発である。

隊長補佐の荻野氏は近畿日本ツーリストの社員で、宿舎、参加費の会計、グッズの管理など一切をあつかう。いわば、部隊の主計将校である。トラックや随行車のなかで帳面や保険の書類を整理する。その他の時間は一緒に歩く。

大庭随行車はウォーク隊とあまり離れぬ場所について走る。隊員は、お駕籠と呼んでいるが、具合が悪くなった人を収容する。気分の悪い人、足に故障ができた人、遠慮なく乗って下さいといっている。座席は七人分用意されている。本部隊に限らず誰でも利用できる。

大庭隊員の車のほかに、伊能忠敬と同業の県測量設計業協会のボランティア随行車二台をつけていただいている。同協会は土木関係の測量と設計の会社の集まりで、当番制で毎日ついてくれていた。ワゴン、ライトバン、乗用車と車種は様々だが、手製の「伊能ウォーク随行車〇〇県測量設計業協会」というでかい札をつけたり、伊能ウォーク記念品の手拭いを車体に貼り付けて、どこからともなくあらわれて静かについてきてくれた。ほとんど会社の社長、役員さんがみずから運転していただいている。主催者としてはまことに有り難いことである。救急車とまではいかないが、体調のわるい人をいつでも収容できるセーフティネットである。

最後になったが、朝日新聞の事務局。部長級のかたが交代で必ずづいている。主として市町村当局との折衝にあたるほか、支援スタッフ

を応援して全体を総括的にみている。伊能プロジェクト事務局の分身である。

さて、到着地に近づくと、事務局は随行車で市役所に先乗りする。市長に挨拶し、訪問記念伊能図署名式の場合、手順、などを市の担当者で打ち合わせる。出迎え役員と協力して、幕を張り、テーブルを並べ、スタンプを出して用意する。本部隊と連絡をとり、市長が庁舎前に出てきて待っているとこへ到着させるようにする。

市長以下拍手で歓迎。到着式ということで、市長の歓迎の挨拶をいただく。来賓の出迎えがあれば、御挨拶をいただく。大内隊長からお礼の挨拶があつて終了する。本部隊員はテーブルの前に立って完歩印を押し始める。伊能教室を開いていれば展示を見るように誘う。そして流れ解散。

一日のスケジュールはだいたいこのような形であるが、宿舎についてからも本部隊には日課がある。ミーティングで隊長、副隊長、コースリーダー、隊長補佐、事務局、グループリーダーが集まって明日の予定を検討する。伊能ウォーク隊日誌は測量日記にならない、当番がその日のできごと、参加人員、出迎え人、宿の良否などを記録する。インターネットの入力は日記から要約し、追加もいれてアサヒCOMの伊能ウォークホームページに入力する。リポーターは目下は松本隊員ひとり。彼女はパソコンのことはとても良く知っていると評判である。

宿泊地の経度・緯度の計測はゼネコンOBの畑中隊員が担当し、携行しているGPSで毎日宿舎の緯度経度を測定して朝日新聞本社に通報している。隔週土曜日に運動欄に掲載される。入浴・食事が済んで一日がおわるが、本部隊員の就寝は早い。八時から九時には床につく。

(注) 総隊長として現場に立ち会っているのが、本部隊の一日を構成してみた。渡辺

常陸路北上参加記

窪谷 悌二郎

◎二月十五日(月) 銚子市役所→神栖町役場 二九km

香取駅でウォーク参加者らしき服装をした人を見て話しかける。

房総半島を随行してきた住友金属鹿島OB氏とのこと。伊能ウォークの雰囲気、長距離歩行方法等を伺いながら銚子着。

出発式でのコース説明。初めての銚子大橋歩行渡河。一行約二百名。大橋最高部での眺望は絶景。筑波山は残念ながら濃気多く見えず。もっとも、近年潮来大橋でも見える日が少なくなってきたので仕方がないか。波崎町に入り、東部再整備センター前にて千葉県から茨城県への「御用旗」の引継ぎ式。同町出身の清水本部隊員の応援ウォーカーが加わり、千葉県側の見送りウォーカーに見送られて出発。旧町内を一巡して利根川に沿って旧街道を北上。この道も通過するのは初めて。今では希少となった茅葺屋根の家屋が散見。矢田部にて昼食。この辺り鹿島開発迄は砂丘地帯。先人たちが水田を耕作するのに表土の砂を一m余りも払い除き造成した「堀下田」も再び残土や廃材で埋め立てられて行くのが多々見受けられる。太田小学校で小休止、此処より国道一二四号線側道を北上して神栖町役場へ。到着時刻、十六時。ウォークを一時中断するとの住金OB氏を潮来駅迄車で送り帰宅。

◎二月十六日(火) 神栖町役場→鹿嶋市役所 十一km

同行会員 藤岡健夫氏。本日の行程、何ら変哲もない国道一二四号線の側道を坦々と歩くのみ。約百五十名。到着時刻、十二時。

◎二月十七日(水) 鹿嶋市役所→鉾田町役場 三三km

本日のコースは、北浦湖岸回り。参加人員約百名。鹿嶋神宮の森を裏より入り奥宮から拝殿・桜門をぬけ鹿島神宮駅に。奥参道を歩くのは何時も清々しい。奥宮前の「芭蕉」の句碑。

此松の 実生せし代や 神の秋

駅にて帰宅する藤岡又従兄と別れる。県下最多の古墳群のある宮中野をかすめ、塚原卜伝の墓入口の旧道を通り湖畔の堤防を北へ。

途中、従兄の須賀田宗右衛門宅に寄る。此処には特別地域図「天の橋立」があるが、土蔵修理中で別宅に在り、展示できなかったと彼の言。義従姉、大洋村境迄見送りウォーク。大同西小学校にて昼食。

大洋村に入り県道茨城鹿島線をそれ農道・旧道を通り鉾田を目指す。札の部落。此処は、一笠一杖人生を旅とした芭蕉の参禅の師である「佛頂禅師」出生の地。近くに禅師ゆかりの大儀寺があり俳句寺として知られている。行路は農道多く碎石敷きのため難渋す。目的地の役場際の高校の校舎は遠望できるがなかなか近づかず。

鉾田。昔、水運の河岸として栄えし処。安永七年五月二九日、忠敬翁三四歳の時、達夫人を伴って此の河岸より奥州松島に旅立っている。この時、船泊りの苦越しに知りあった奥州商人と仙台まで同道し、二四年もの後、第二次測量の途上再会するとは。これだから旅は面白い、などと思ひ巡らせながらようやくたどり着く。到着時刻、十六時半過ぎ。

◎二月十八日(木) 鉾田町役場→大洗町役場 二十km

県道水戸鉾田佐原線を通り、旭村に入り国道五一号線へ。同行約九十名。途中難訓地名、勝下・子生を経て間道に。特産のアンデス・メロン(買って安心、食べてアン心デス)のハウスの間を通り子生の風致地区へ。せっかくの風致地帯も家庭用ゴミ等の不法投棄で台

無し。再び国道を旧動燃大洗工芸センターへ、昼食。

大洗海岸を遠望しながら夏海の間道へ。この銚田〜縦山〜勝下〜子生〜夏海の道も、忠敬夫妻の奥州紀行時のルート。間道から大貫の歩道橋を経て海岸道路へ。歩道橋からの眺望は良好。濛気のため鹿島臨海工業地帯の煙突は見え、道路沿の小松林のウォーキング・ロードを通り役場に到着。時刻は十四時半近く。

◎二月十九日(金) 大洗町役場〜水戸市役所 十五 km

昨日までの天候と異なり風強く雨が降りそう。約八十名の参加。1 kmも歩かぬ内に雨具着用の指令。大洗磯前神社の松林を通り抜け常陽明治記念館を経て大串貝塚ふれあい公園に。途中、時々風雨烈しく寒気強し。国道五一号線側道を水戸へ。左手に「六地藏寺」。

此処に、弱冠十四歳にて長久保赤水翁八二歳の肖像を描き、四五歳のときに久保木清淵先生の墓誌・篆額を書いている立原杏所の墓がある。北西約1 km余りの「酒門墓地」には墓誌を撰文した小宮山楓軒先生の墓も在り、事績で遠く潮来・佐原へとつながっている。

浜田より国道を左折し備前堀沿いに銷魂橋へ。此処が「水戸街道」の水戸城下町への出入り口、少し離れた本町三丁目では「岩城相馬街道」となる。いつしか雨はみぞれに変わり市役所に到着。時刻は十三時過ぎ。渡辺代表理事等の出迎えを受ける。

◎二月二十日(土)〜二四日(火) 所用のため不参加。

◎二月二五日(水) 高萩市役所〜北茨城市役所 十四 km

四時半潮来発。六時半高萩市役所に到着、一一四 km。天候は曇天。同行会員、渡辺代表理事・永野達代氏。一行約一四〇名。本日のメインは、渡辺代表理事が十九日「忠敬は次の世代に必要な地図を作ったが、赤水はその時の世の中に必要な地図を作った」と講演をされた、水戸藩侍講であり地理学者でもあった長久保赤水翁の遺跡

の探訪。赤浜の旧岩城相馬街道沿いにある生誕地・墓所・旧宅等四カ所で地元関係者の方々から懇切丁寧な説明を受ける。

墓誌は、五代藩主宗翰の子、六戸藩五代頼救の撰文・書のもの。

国道六号線に出て北茨城市に入り、大作の浜で昼食。旧道に入り、磯原町の区画整理地区側駅前。再び国道に出て野口雨情旧宅を見学。北茨城市役所に到着。時刻、十四時半過ぎ。会員でもある河井明子又従姉夫妻の出迎えあり。久方振りの対面。

◎二月二六日(木) 北茨城市役所〜いわき市JR植田駅 二四 km

昨日同様、四時半出発、六時半過ぎ磯原駅前到着、一二五 km。天候快晴、風強し。茨城県最後のコース、参加者は約七〇名。名勝「二つ島」から海岸防波堤際のウォーキング・ロードを波の碎ける音を聞きながら大津港へ、市街から五浦に入り「茨城県天心記念五浦美術館」で大休止。菊多浦から小名浜方面の眺望絶景。朝日記者氏の「茨城県下で最も印象に残った景観は」との質問に答えたステイジ隊員・某氏の答え「今日の磯原からの景色かな」。旧道を経て平潟の漁港へ。県境の切通しを通過し福島県に入る。国道六号線から

勿来の関跡に正午前に到着。福島県側の出迎え約百名。直ちに「御用旗」の引継ぎ式。予定時刻遅延のため休む間もなく出発。勿来駅から旧国道六号線沿いに「いわき市役所勿来支所」に到着、昼食。到着時刻、十三時十分。大内隊長等に別れを挨拶し、植田駅に直行し、帰路。

七日間の「伊能ウォーク」に参加しての感想

わが郷土とは言え公德心の欠如に憤慨。道路沿いには空缶、コンビニ弁当のポリ袋、吸殻等の散乱。山林等での家庭用ゴミ等の不法投棄。車の入らぬ道では犬の糞害。蔓延るのは、荒地の篠竹だけとは余りにも情け無い。

陸前浜街道

福田 弘行

一月二十九日に江戸東京博物館で出立式と見送りを、二月十四日には銚子大会をみてから、一度ウォークに参加したいと思っていた。できるだけ早いほうがと三月に思いついて計画を入れた。渡辺代表理事に伺い何かとアドバイスをいただき準備を整える。三月三日は午前四時起床で埼玉から福島県富岡町へ向かう。天気は晴れ。町役場への到着は予定を遅れ八時過ぎ。さっそく朝日新聞の遠藤さんを訪ね、同行をお願いする。研究会の大庭さん新沢さんに挨拶。ここで出発式が始まりまもなくスタートしたため本部隊のみなさんへの挨拶はあとになる。いままで新聞紙上や出立式での見覚えのある顔がみじかにある。今日は双葉町まで二十キロの予定。地元歩けの方が旗を持ち先頭に行く。嶋さんや岡田さんも旗を持って続く。本部隊、ステージ隊に二十名くらいのデイルー隊。ここでアンカー役に井上さん、藤田さん、清水さん、松本さんたちとの話。「今日で三八日目。東京からの距離はゆうに七百公里を越えている」「靴の具合は?」「快調ですよ。この靴は1万キロは大丈夫なので」「伊能さんは一日にわらじを何足か取り替えたそうですね」「今は道も歩きやすい」「ここまでお天気に恵まれ、九十九里以外雨の日はほとんどなかった」「今日は何日で何曜日?こういう感覚が薄れてきてね」「札幌には桜前線より早く到着しますよ」など会話がはずむ。

脇を見ると「救護車」と貼り紙をつけた車がつかず離れずつい

てくる。県の測量協会の支援車だそうである。それと大庭さんが運転する「伊能車」も見える。しっかりしたサポート体制にさすが平成の伊能ウォークと感心する。作家志賀直哉の「ぐみの木」の碑の前を通る。今日の最年長は八四才の男性で志賀さんだそう。コースは福島県浜通りの海岸寄りを北に向かう。ここで遠藤さんから話を伺う。「車を運転しながらウォークのようをビデオ撮影するのはスカイTV記者の中山さん、写真を撮ったり参加者から取材するのは地元の記事」「初めの頃は予定外の出来事があり苦労があったが、最近ようやく毎日のペースをつかめ調子が上がってきた」。歩きながらも携帯電話で何かと連絡に忙しい。

海が見え河口に出る。同行の地元の方に聞くと「これから鮭の稚魚の放流が始まり秋になるとこの辺りの川にたくさん戻ってきますよ」と。熊川漁港近くの海岸で休憩。ここでは町の人達が太い青竹を利用した竹のコップに上流の源水を入れて一行に配ってくれる。「おいしい」一息入れる。田舎の人達はとても明るい顔をしている。海のブルーがまぶしい。ここで朝挨拶できなかった大内隊長、柳生副隊長に紹介していただく。歩行のペースも程々で歩きよい。天気も雲が取れ快晴に。第二次伊能測量隊はきつとこの辺りの陸前浜街道を通ったにちがいないと測量日記にはどう記載されているのか一度調べてみたい。

十一時近く福島県の栽培漁業施設に到着。大きな水槽には二センチくらいの鮎の稚魚、別の水槽には十センチ程度のひらめがたくさんいた。卵から稚魚に育て放流する事業だそう。ここでそれぞれに芝生で昼食。地元の熊川町の方々が「ひらめ汁」のおいしい差し入れ。新鮮なひらめと豆腐、ねぎ、三つ葉の入った暖かい味噌汁が先程の竹コップに。ありがたぐちそうになりおかわ

りまでさせてもらう。食後新沢さんをみつけ話を聞く。いろいろな熟慮の末伊能ウォークに参加。この仕事には代わりがないので是非元気で完遂したいと聞いて大きな縁の下の方を持ち、とてもたのもしき若者がここにゐるのを知る。

ここからは海岸を離れ内陸に入り、福島第一原子力発電所を見学後双葉町の田園地帯をゆく。松本さんから「足は大丈夫ですか」と気づかいをもらう。役場の人達の歓迎を受けゴール。遠藤さんたちはすでに到着式の準備をされており手際よく式に入る。双葉町は人口八千人の町でよくそと岩本町長の歓迎挨拶。柳生副隊長の式進行は軽快でご自身の名前「昌良」とテーマソングを歌う歌手「AKIRA」と同じと披露。また福島県出身の松本さんから町長に記念品が渡る。例の伊能図に町長が署名する。二八人目のように見えた。式後一旦バスで出発地点に戻る。八四才の志賀さんはステッキを持って田のあぜ道をさっそうと歩いて帰った。私の万歩計は二万八千を越えていた。

今日の宿泊は双葉駅前のいつか寅さん映画で見たような駅前旅館。スタッフメンバーは遅れて宿に到着。何かと後始末と明日の準備に忙しい。ひげの荻野さんも宿の手配など毎日ご苦労している。

いよいよ夕食。隊長の音頭で乾杯後みなさんの苦労話などいろいろ話はずむ。座の雰囲気がい。もっと聞きたいが食事が終わったところでお開き。皆さんそれぞれお仕事がある。邪魔をしないで早寝。

翌四日は駅を通る列車の音で目が覚める。五時過ぎだが近くの部屋ではもう準備が始まっている。今日の歩程は三二キロ。今日

も天気はよさそう。朝食が終わるとさっそうく行動に移る。一人まだ寝ているのは中山さんだ。当日撮影したビデオの編集など深夜までご苦労があるので少しでも睡眠をといたい思いやりは聞いてうれしい。新沢車は六時過ぎから荷物の出し入れなどですでに活動が始まっていた。七時過ぎに町役場につくとさっそうく受付の準備が始まる。それぞれ分担が決まっているようである。そこに歩いて岩本町長が出動し、差し入れに湯気のでるコーヒを戴く。そのうち当日参加の人たちが次々に現れ広場の人数が増えて行く。そこに胸に金バッチの背広姿で昨日参加した八四才の志賀さんがさっそうと現れみなさんと親しくご挨拶。これも心意気かと感心。配達された新聞には昨日のことが記事になっている。なかなか新鮮。昨日はあわただしい出発でゼッケンを着けず歩いたが、今日はしっかり書く。

「心意気が伊能ウォーク!二三世紀への大きな遺産!」

伊能さんは二百年前に歩いた。二一世紀までこのメンバーは歩き続ける。そして二百年後は二三世紀になる。その時平成の「伊能ウォーク」が蘇れとの思いからだ。

今日は室蘭からの参加者がいた。昨日仕事を終えてから夜行列車でかけつけたそうだ。四月下旬にこの一行を迎えてくれる立場の方でその時はぜひ暖かく迎えてほしいと願う。今日は始めからペースが早く時速五・七キロくらいとか。自転車の後ろに幼い子に乗せて歩く若いお母さんがいる。この辺りも今年は暖かくまだ雪は一回だけらしい。途中の幼稚園では園児たちに小旗で歓迎される。一時間以上歩き最初の休憩地の請戸漁港に到着。どうもペースが早いせいか右足に豆の気配。漁港沿いに歩き始めると岸壁際に人だかり。何かとのぞいてみると透明な白魚の中にイワシが少

し混じっているのをより分けていた。列に追いつき清水さんに「白魚でした」と話すと「この団体行動でなければ是非見たいが寄り道すると列を乱すので遠慮している」と。この言葉にハッとする。この克己心がウォークを支える一つの礎にちがいない。またこの先で地元の案内係の方が歩行たばこを吸おうとしたら県歩けの方から歩行禁煙を注意されていた。こうした一定のルールは伊能測量隊にも記述があったようだ。右手に太平洋をみて進む。

今日は寄り道なしのため歩行中の会話が耳に残る。「ものが二重に見える目の病気で治療に苦労したが思いきってこのウォークに参加したら大分良くなってきた」のはステージ隊の方。「私のマラソンでの記録は三時間三十分」「私は三時間十五分」「この十五分がたいへんなんだ」は本部隊か。「その土地土地での地酒がうまい」には今度の時は是非地元酒も差し入れしようかとも。「徳島県阿南市からきて札幌までゆく。参加には仕事の段取りを工夫したよ」はステージ隊のひげの立派な方。地元の斉藤さんは「以前年寄りの介護疲れで体をこわし病院通いをしていたが子供に勧められ歩き始めたらすっかり元気になった」など。ところどころで農作業中の人や村落ではお年寄りから「こんにちは」「どこまで行くの?」「がんばって」など様々な激励をもらう。小高川河畔には白鳥がいた。まもなく塚原に到着。

海岸の護岸階段で待望の昼食。海から風は冷たい。弁当の塩鮭はたぶん昨日通った熊川で採れた鮭のようだ。短い休憩時間に足に絆創膏を張る。みなさんの歩数計は東京からの累積キロ数で計測している。また昨日の竹コップを記念にといただいた。ご好意に感謝。

その後もひたすら歩く。韓国から来ている金さんとも一言。原

町市に入り遠くに何やら旗が見えあそこがゴールかなと思えたが近づくとも市役所から迎えの人達。旗は相馬野間追いで使うものだという。旗を持った市役所の方と並んで歩きながら野間追いついて話を聞く。まもなく原町市のスポーツセンターに拍手で迎えられゴールイン。万歩計は四万三千歩を記録していた。

式典後に皆さんに別れをつげる。たった二日の同行だったが暖かく感謝の言葉を受け恐縮。こちらこそ突然の飛び入りでご迷惑かけないように思っていたので感激。良いメンバーに会えたこと、四千万歩に向けてつつがない旅を願い、またどこかで応援できればと再会を誓う。一行のみなさん全員にご挨拶ができないのが心残り。双葉町までのマイクロバスの中にはぎやか。みなさんは今日のウォークを十分楽しんだようだ。誰かが六月に中通りで会えるのでまた参加しようという声があった。是非また一緒に歩いてほしい。五二キロ七万一千歩のウォークで足には豆ができたが気持ちの疲労は少なく、今度はいつ行こうなど次のステップに気を巡らせながら帰路についた。

(新入会員)



芳名録より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

往古欽
英風
新平

李白の詩「懷古欽英風」

「英風」はすぐれた徳風、すぐれた風采とありました。

後藤新平氏については、たまたな縁戚にあたる座間四郎氏のエッセイの中にエピソードがあるので要約したい。

後藤新平が東京市長時代に、忠敬旧宅を見学に訪れた。その際、五代目にあたる祖母、孝が応対したが、後藤氏がまことに熱心に見学されたので、お見せした江川太郎左衛門と忠敬との往復書簡のうちの一通を記念にと、秘書を通して進呈した。数日後、後藤新平から鄭重な礼状と共に、江川の手紙が同封してあった。礼状に曰く、江川と忠敬の往復文書は、後藤新平個人の私すべきものではない。日本民族の至宝である。他の遺品と共に散逸せざるよう、伊能家で大切に保持して欲しい云々と。

伊能 洋

第四次測量における加賀藩測量の実態 二

河崎 倫代

西村太冲、測量手伝いを願ひ出る

享和三年六月二七日（一八〇三年八月一四日）、加賀藩領に入った伊能測量隊が「領主より差図なし」と、村高・家数の返答を拒否されたのは、歌舞伎十八番『勸進帳』の舞台となった小松市安宅の海岸である。今そこには弁慶と富樫、義経の銅像が立ち、松風がつかの間八百年前の源平の世に運んでくれる。およそ二百年前に安宅へやってきた伊能測量隊にも、弁慶・義経一行と同様の緊張感が走ったことだろう。全国二百数十藩、「他藩は他国」の江戸時代に全国を測量して回るのは、大変な苦勞と心勞を伴っただろう。第四次測量までは「幕府御用」とはいえ各藩の対応に差があり過ぎた。加賀藩は伊能測量隊にとって第一次測量から数えて何番目の藩にあたるのだろうか。それまでかなりの藩を経由していろいろな体験をしてきた忠敬であるが、加賀藩の対応をどの程度と予想していたのだろうか。『測量日記』を見てみよう。

※前回紹介できなかったが、加賀藩の対応について述べた著書・論文の主なものとは次の通りである。ここ数年間の調査によって、加賀藩測量に関する史料はかなり出そろった。地元生まれ住んでいる生活者の目で、今一度見直してみたいと思っている。そのために同一史料の引用もあることをご理解いただきたい。

①大谷亮吉『伊能忠敬』一九一七年、岩波書店。

②増村宏「大谷亮吉『伊能忠敬』の日本測量について」保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』所収、一九七四年、古今書院。

③竹内慎一郎『伊能忠敬の越中国沿岸測量記』『富山県土地家屋調査士会報』一九七六～一九八四年。

④渡邊一郎『幕府天文方 伊能測量隊まかり通る』一九九七年、NTT出版。

⑤渡辺孝雄「伊能忠敬の全国測量と現地の対応について―第一次測量―第五次測量を中心に―」東京地学協会編『伊能図に学ぶ』所収、一九九八年、朝倉書店。

五月二一日、美濃関ヶ原に逗留中の忠敬のもとへ、越中城端町の天文曆学者西村太冲の弟子小原治五右衛門が二通の書状を持参した。一通は太冲から忠敬への加賀藩測量手伝い願ひ書、もう一通は忠敬の師高橋至時の紹介状である。太冲は一七歳で京都に出て天文曆学者西村遠里に学び、遠里の死後、推されて西村姓を継いだ。のち大坂に出て麻田剛立の門に入り、高橋至時や間重富とともに剛立から奥義を伝授された。寛政十一年（一七九九）金沢に赴き、藩校明倫堂で天文曆学を講じたが、一年で城端にもどった。再度上京して研究を継続することを願ったが許されず、藩主より年五両を賜って城端で医業を営んでいたという。（筆者の最近の関心事の一つは「加賀藩に天文曆学・測量術をもたらした人物は誰か」である。注目している人物は本保以守と西村太冲だが、現時点では史料不足のため言及できない。）忠敬宛の書状には、太冲自身の出国ままならず弟子を遣わしたと書かれている。書状の他に、幕府からの先触と加賀藩の御触の写しがもたらされた。忠敬にも行く先々の情報が少しは入っていたことが分かる。それによると、加賀藩では忠敬の身分格式にこだわった。

勘解由格式等之儀御用番ニ而承り合候所、高橋作左衛門弟子ニ而、未 公儀江被召抱候義ニ而も無之者ニ候間、敢而重キ取扱ニもおよひ不申旨、

その結果、藩士や十村（他藩の大庄屋。苗字帯刀許可）を挨拶に出さない。本隊と手分隊に各二名ずつ十村手代を付き添わせ、案内と監視と用達にあたらせる。実は、十村も測量隊の休泊所へ出向くのだが、裏で手代たちに指図せよとの達しであった。身分社会は複雑だ。ところで加賀藩内には数十か村の幕府御預所が散在していた。ここでは各二名の「御預所掛下役」の藩士が挨拶に出て、時には付き添った。以前この下役たちこそ加賀藩の監視役とした論考もあったが、逆であろう。幕府領だからこそ下役であっても藩士が挨拶に出てきたのだ。『測量日記』には所々で御預所の村高・家数が記載されているのも納得できよう。

加賀藩、太沖の測量手伝いを許可せず

太沖の依頼に対する忠敬の返答は不明だが、『加賀藩史料 第十一編』には次のようにあるので、忠敬は了承したことが分かる。

六月十五日、測量御用として罷下候伊能勘解由儀、御領国江罷越候節、西村太仲・小原治五衛門江手伝頼度旨、太仲等へ紙面指越。

〔太仲〕は「太沖」の誤記である。）

忠敬が太沖と治五衛門に測量手伝いを依頼したということになっている。事実とは逆である。それはともかく結果は、藩の重臣長甲斐守連愛が太沖の測量手伝いを不許可とし、以後忠敬との通信・面会を

禁じ、病氣だとして城端町に拘束したのである。第五次以降は測量技術の修得のために藩士を積極的に手伝わせた藩もあったが、第四次測量まではその例を知らない。なぜ加賀藩は測量手伝いを禁じたのだろうか。その理由として、先の史料は次のように続いている。

寛政六年にも海辺之村々等御書上に御座候。加様之品を以御しらべも被仰付候哉。然所太仲等手伝仕候へば、海辺等之様子委く申伝候様成事にては不可然様奉存候

太沖から忠敬へ加賀藩の海辺情報が漏れることを警戒したようである。寛政六年の海辺調査の詳細は不明だが、寛政四年九月、ロシア使節ラックスマンの根室来航に驚いた幕府は、翌五年三月、沿海諸藩に海防強化を命じた。それに呼応した一連の調査だったのかもしれない。

忠敬、金沢城下へは量程車で

忠敬が承知していたどうかは不明だが、加賀藩の警戒心を示すものとして、測量隊の行動を「御隠密がましき」とした史料がある。現在までに『加藤氏日記』と『伊東文書』と岡部家の『享和三年御用留』の中にあることを確認している。いずれも十村を務めた家である。史料全文は高瀬重雄著『越中の絵図』（一九七五年 巧玄社）に紹介されている。

一、村之内高方并海辺岸暨村境より村境迄、一村一村之町間相尋、其外右類御隠密がましき儀相尋候共、下々役人共心得ニ而難答、金沢表夫々向之役人江不申達而は難答段、相答候様可被申渡置候、其上ニ承度旨申聞候ハバ、其段可被申趣候、

加賀藩の警戒心や非協力的な態度を察して、忠敬もかなり警戒心を強めたようだ。『測量日記』の記載内容には不自然な点が多々見られる。

① 糸魚川事件のような、「幕府御用」を前面に押し出した高圧的ともいえる態度は一切出さない。

② 海岸から金沢城下までの測量には精度の劣る量程車を使用し、なおかつ地図上でも『測量日記』でも、その間の村名は記載されていない。筆者の住む旧畝田村もこの道筋にあり、加賀藩の積出港宮腰と藩都金沢を結ぶ直線道路である。図A・Bを参照にしてほしい。福井城下や大聖寺城下、富山城下の場合には村名の記載がある。第四次測量での量程車使用は、他に駿府と名古屋城下が『測量日記』に記載されている。いずれも大掛りな測量作業を憚ったものと思われる。

③ 西村太冲とのその後について、どこにも記載されていない。加賀藩の警戒が厳しくて連絡がとれなかったのか、『測量日記』にはわざと記載しなかったのか、不明である。

能登・輪島の不思議な史料

能登半島の北西端に、輪島塗りと朝市で知られる輪島市がある。その住吉神社所蔵文書を四点紹介したい。『能登輪島住吉神社文書目録』のA118・249・259・260である。

A259 天文方御役人通行の際の御用二付廻達状

(端裏書)

「二度め御触

初而御触三度め□河井町江持参候而相返し不申候、」

御紙面参拝見仕候、如仰弥安康ニ被遊御座候由、承知仕□□ニ奉存候、然ハ天文方御役様方御様子御尋被下、是又承知仕候、御様子相志れ候ハ、為御知可申上候、

一、大崎村庄屋衆ハ三月相来候廻文写

覚

一、杉杭 壹本

一、竹 壹本

但三間位、

右ハ先達而御触在之候天文方御役人様御通行之節、村境江相立被成候、尤竹之末ニ紙三枚計相附可被成候、先村ハ申参候、

左様御承知可申候、甚佐村ハ先村江御順達可被成候、以上、

右之通り、上村々より順達来候ニ附、当月四日長尾村江順達仕候間、

左様御承知可申候、

右御報□如此ニ御座候、折節取込乱筆御高免可被下候、以上、

四月九日 城岩村

庄屋

布出村

庄屋

藤右衛門様

右城岩村ハ申参候故、一寸御纔ニ入申候、

布出村

庄屋

下村

御庄屋衆中

A 「大日本沿海実測全図小図」

英国グリニッチ国立海事博物館蔵

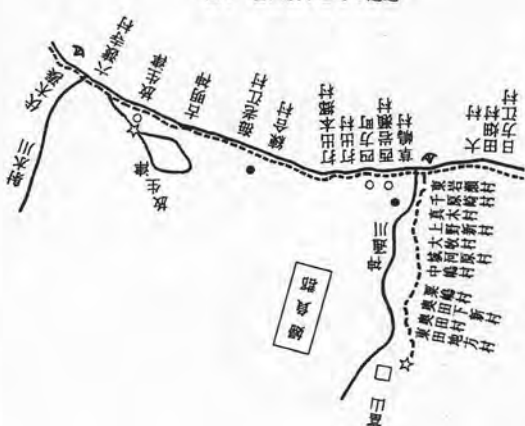
B 「伊能中図・第五図 (中部)」

東京国立博物館蔵



図1 金沢城下とその近辺

図2 富山城下とその近辺



A249 天文方御役人御通行の様子届書

口上

一、天文方御役人様、当月七日田原御泊りニ御座候所、雨天故御逗留御座候、快晴次第九日晚牟呂村御泊り之様子ニ御座候、右之趣御志らせ申上候、御承知可申候、

一、人足之義、三十五人程村境ニ村境迄可被遣御様子ニ御覺語被成候而、宜敷様ニ申参り候間、是又左様ニ御心得可被成候、以上、右之趣、吉田村ニ申参候間、右之写差上申候、左思召可被下候、

源しま

卯月十日 庄右衛門

藤江村

庄屋衆中

A118 測量方手伝罷出ニ付人足心得方申渡覚

(端書)

「四度め之御触」

覚

一、海辺長間数六尺五寸竿ニ而下村へ打置、是ハ御目分ニ御打被成候間、申上候ニ不及、為念打置候小紙ニ而、村々差出申、

但元高 何郡何村

一、高何程

一、家数何程

右之通

一、人足荷物持人足廿五六人、海辺手伝人足七八人、凡村々四十人程手当、

一、膳刀御馳走之事

一、汁五菜ニ而も三菜ニ而も、尤魚類ニ而も精進ニ而も見合、

一、夜具之儀ハ、先達而廻文之通手当、

一、三間位之竹、村境又ハまかり角等へ立、所ニより三四本五本程も杭ニ結付候也、

一、川すそニ船ニ而も人足ニ而も出し置、差支無之様、尤荷物人足ハ勝手道通り申候、

右手伝人足ハ入用道具持セ御供いたし、川すそ通り候、東浦村々ニ而も川口ニ船橋大方かけ置候、海辺通りにくき所ハ小船出し置、船ニ而御通被成候、

座敷

御老人

一、上ノ間 沓間 一、弟子衆 侍衆 四人 沓間

一、供三人 沓間 外に道具入 沓間

一、南北広き地 十坪斗の明地 沓ヶ所

是ハ御宿はなれ候而も不苦候得共、夜分之儀御見分道具等多無之候ニ付、宿近所ニ取申候事、

右之通御座候、廿六日晚東端村御泊り之筈御座候所、雨天ニ付いまた相延申候、雨天諸星相見江不申候内ハ、我らも逗留ニ御座候、

四月廿七日朝

A260 天文方役人海辺御改御通行ニ付心得方廻状

一、公儀天文方御役様方、昨日五日夕熱田宿御止宿、夫々海辺御改重而向御越被成候様奉存候間、先達而廻文之通人足四拾人ほと御用意被成置、別紙絵図之面之通ニ見当竿立置可被成候、尤東村々

掃除等仕候間、為御心得申遣候、為其如斯ニ御座候、以上、
佐屋宿問屋

加藤五左衛門

五月六日

津嶋村[△]

大垣宿迄

川付村々夫[△]

江州春照宿迄

右宿村

御問屋

御庄屋衆中

尚々急成御用ニ候間、此

廻状昼夜共早々御順達

可被成候、以上、

目録を調べて、伊能測量隊関係文書に間違いなしと思ったのだが、実際に読んでみると???の連続。筆者が施した傍線部の地名のうち、最初の河井町だけが地元輪島市のもので、あとはまったく心当たりがない。日付から見当をつけて『測量日記』を開くと、すべて三河国にあった。入手経路は不明だが、三河地方における四・五月の測量隊関係の村方廻状であろう。日程等を『測量日記』と照合すると、次のようになる。

月／日 『測量日記』の日程 (誤記)

史料番号

4／7～9 田原城下 宿泊

二兎(4／10日付)

10 牟呂村 宿泊

二兎

11／13 吉田城下 宿泊

二兎

17 藤江村 測量

二兎

20 東浦村々 測量

二八(4／7日付)

21 成岩村 測量

(城岩) 二兎(4／9日付)

21 長尾村 測量

二兎

22 布土村 測量

(布出) 二兎

28 次佐村 測量

(甚佐) 二兎

28 東端村 宿泊

二八

5／5・7 熱田 宿泊

二〇(5／6日付)

12 津嶋村 測量

二〇

12 佐屋宿 宿泊

二〇

15／16 大垣宿 宿泊

二〇

(18／21 関が原 宿泊)

二〇

22 春照宿 宿泊

二〇

あくまでも推論でしかないが、時期的にも地域的にも、前述した西村太沖の弟子小原治右衛門が美濃関ヶ原へ忠敬を訪ねた際に、前後の村々で入手してきたものではないか。太沖は加賀藩における御触を二通、忠敬のもとへ持参させた。逆にこのような廻状類を持ち帰るように、弟子に指示していたとしても不思議ではない。A259の端裏書にあるように、三河地方の廻状が少なくとも輪島近辺の村々を廻ったのである。おそらく三河地方には同文の原史料なり写しなりが存在するはずである。

この文書のそっくりさん探します。連絡下さい。

TEL&FAX 076-268-5725 河崎

伊能家文書紹介十二 その一

二人の師 高橋至時ヨシトキと間重富ハサマ

安藤 由紀子

麻田剛立ゴウリツと大坂

伊能図完成の源にいた人物は間違はなく、麻田剛立（一七三四・享保19年〜一七九九・寛政11年）である。十一年後に生まれたただけだが、伊能忠敬は、彼の孫弟子に当たる。

麻田は杵築藩（現大分県杵築市）を抱えの漢学者綾部安正の第四子で、名は妥彰ヤスチヤウといった。幼い時から天文を好み、独学でその道を極めた人である。まず医学を修め明和四年に藩医江戸詰めとなったが、忙し過ぎて天文学に割く時間がなく、辞職を願っても藩主に許して貰えなかった。同六年ついに脱藩して麻田と名を変え大坂に隠れ、医を生計として観測に熱中し、「夜間就寝せざること数年、学大いに進む」。

彼は漢籍で西洋の天文学を学んだが、実測に重点をおいたので、ケプラーの著書が伝わる以前にその第三法則を理解していたといわれる。

彼は藩医になる前の宝暦十三年三十才の時、当時の暦にない日食を予報し、幕府天文方にショックを与えてその名を天下に知らしめた。

また世に「麻田流」と呼ばれる実証的天文学の一派をなし、「先事館」という塾を開いた。そして、高橋至時・間重富・坂正永・西村太冲・足立左内・山片蟠桃パンタウなど、大勢の俊才を世に送り出した。

若年寄堀田摂津守正敦マサノブは、寛政七年、幕府の権威の象徴としての改暦に、麻田の力を借りるという決断をせざるをえなかった。

麻田がその招請を断り、高弟高橋至時と間重富を推薦したのは、老

齡のためというのが定説であるが、大坂にいたのを知っていて知らぬ振りをしてくれた旧主、松平（能見）親盈ちかひ・親貞父子に遠慮してのことだったとも言われている。藩主は郡奉行だった長兄妥胤ヤスツネとの文通も許し、兄は彼にいくばくかの援助をしたらしい。麻田剛立は終生、民間学者としての道を選んだのである。

剛立には実子がなかったので、長兄の次男を養子とし、立達リツダツと名乗らせた。剛立は晩年老人性痴呆になっらしく、医業を続けられず貧窮した。その上養子立達も多病で歩くこともままならず、間重富は望遠鏡のレンズ磨きを指導して、生計を助けた。高橋至時と間重富の往復書簡（写本・「星学手簡」）を読むと、二人が幕府御用を拝命して江戸に出てから、麻田家をどんなに気遣っていたかが分かり、江戸時代の師弟関係を目の当たりに見る思いがする。麻田剛立は寛政十一年、六六才で亡くなった。彼の労作の多くは今日に伝わらず、弟子たちの著書のなかにその面影を見るのみである。

大坂は不思議な都市である。

脱藩して隠れ住み、医業でなにがしかを稼ぎ、学問を続けるとしたら、当時経済都市大坂以上にふさわしい所はなかっただろう。

すでに五十年ほど前の享保九年に、好学の富裕な町人たちが発起人となって、「懷徳堂」という塾が開かれた。二年後には幕府の官許を得、中井竹山・履軒兄弟が学主を務めた頃を全盛期として明治二年まで続いた。学風は朱子学を中心としたが、合理主義的思考と日常倫理の普及に特色があった。受講者は上層の町人たちで、山片蟠桃などの町人学者を生み、学問交流センターともいうべき役割を果たした。学主・儒者中井履軒は、脱藩以来ずっと麻田の面倒をみてきた。安永二年出版の自著に、麻田の犬、猫などの解剖図をのせている。

漢学と蘭学はきわめて深い関係を保ちつつ明治へと進んだ。儒学の

普及の上に受容されたからこそ、蘭学は急速に発展したと言われる。麻田には蘭語の知識はなく、独学はすべて漢訳書で行われた。医業も蘭法でなく、古法であった。

麻田の「先事館」と中井の「懷徳堂」は、競い合い、交流し合い大坂の地はこの頃日本の文芸・科学の一大発信地となっていた。

鎖国とは？

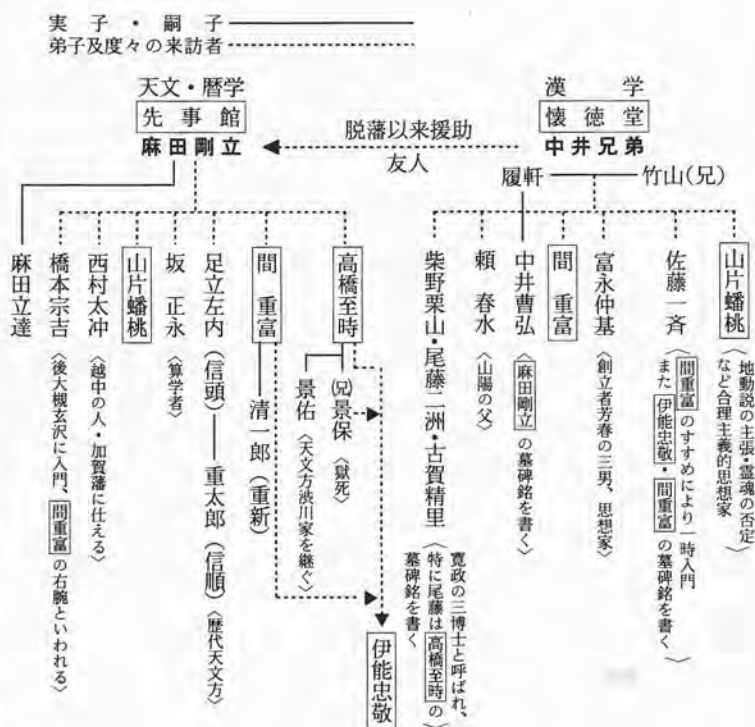
鎖国を「ゆるやかな情報革命」と位置づけた市村佑一氏の著書によれば、「鎖国」は、いわば日本が情報の「発信」を停止し、海外の情報を丹念に「受信」していた時代であった。

「幕府は、將軍を頂点とする垂直的な流れを軸とする公的回路によって、情報（『オランダ蘭風説書』など）をコントロールすることを基本とし、水平的な流れを可能にする私的回路はこれを排除しようとしていた。・・・しかし情報^{情報}は次第に水平的に流れ始め、外国船による国際化の波が押し寄せるにおよんで、より多くの情報を必要とする幕府は、逆に私的回路をみずからの回路に取り込んでいかざるを得なくなり、幕末にいたって公と私は共存していく」

日本は鎖国のなかで、海外の情報をソフト・ランディングさせて、近代化への準備を整えたのだということになるか。市村氏は「その意味で江戸時代は、ゆるやかではあったが、一つの情報革命の時代であった」と結論しておられる。幕府が改暦にせまれ、麻田剛立に助けを求めたのも、この文脈でよく理解できる。権力が追い詰められて、硬直化した幕末に、公的回路と私的回路はギクシャクし、「シーボルト事件」や「蛮社の獄」を引き起こした。世の中が変わる時とは、そういうものなのであろう。

「麻田流天文学家」グループと伊能忠敬

麻田剛立は、伊能忠敬が第一次の測量に出発する前年の寛政十一年に亡くなった。二人は顔を合わせていないと思われるが、大坂に源を発した天文学と漢学の交流の人脈を図示してみよう。



こうした人脈の中に、伊能忠敬もいたのであって、わが天文・暦学者達がすべて、「懷徳堂」に關係する人々に墓碑銘を書いてもらっていることにも、目を引かれる。

ゴロウニン事件

文化八年エトロフ、クナシリの沿岸を測量中のディアナ号艦長・海軍少佐ゴロウニンは、七人の部下と共に松前奉行配下の調役に逮捕され、二年三か月間も幽閉された。四、五年前にエトロフ・利尻などでロシア人が行った私的略奪の仕返しのためである。同九年、副艦長リコルドは高田屋嘉兵衛外四人を捕らえた。幕府は優柔不断な長い評議のすえ、ロシアと和解することに決め、嘉兵衛と引き替えに翌十年に彼らを釈放した。有名な「ゴロウニン事件」のあらましである。

史料一

B一 伊能忠敬自筆写し 麻田立達宛 足立左内書簡

(文化十一年) (世田谷伊能家文書)

(当正月足立氏ヨリ、麻田氏へ来り候年始状之端書)

一、小子去春、松前へ罷越候ヨリ彼地

在留之魯西亞人、七人之内、

ゴロウイン、モウル、レフニコフ

右三人之者ハ、頭分之者ニ御座候故、

日々罷越、對話仕、言語稽古いたし候。

ゴロウインは、カピタン、酋長之儀ニ候得は、

学才も有之、

(中略)

レフニコフは、船司ニて御座候。数学を

能いたし、毎々天学之事を談論ニ

及候處、小子如キの不才薄学之申聞

候之處ニ有之候得共、最早日本ニも、左様ニ

相聞ケ有之候哉と、甚感心いたし居候。

察候處、此地ヨリ漂流人、幸太夫、新蔵、

磯吉、又ハ仙台、石巻之者共ニ至迄、
船乗之儀、殊ニ我日本之掟として

他国へ航海は不相成、夫故日本人皆々

彼等之如キ文蒙之者と、相心得候哉と存候。

又々日本中之談話と違い、異国

者之説話を承り候事、大ニ面白く、

(中略)

一、魯西亞人共、松前表ニ罷在候處、

此度御返しニ相成候ニ付、八月十七日

箱館ニ被差遣候ニ付、同所發足、右ニ付

小子共も、同所發駕いたし、箱館表へ

罷越候處、九月十七日、魯西亞船

シアナ船名、箱館へ着船いたし候。船

長サ十七、八間、幅五、六間、石火矢数挺

相備有之、帆柱三本、帆数十三枚程も

相見へ申候。(後略)

「(当正月、足立氏より麻田立達氏へ送られた年始状の端書き)

一、私は去年の春松前に着いてから、留め置かれていたロシア人七人のうち、ゴロウイン、モウル、レフニコフの三人が頭分なので、毎日出掛けて対話してロシア語の稽古をいたしました。

ゴロウインはカピタン、つまり酋長なので学才もあります。(中略)
レフニコフは船司で、数学が達者です。彼等と毎回天文のことを論じましたところ、私のような不才薄学の者が相手だったのに、『もう日本もそんなに開けているのか』とたいへん感心しておりました。

察するに、この地よりの漂流人、幸太夫・新蔵・磯吉、また仙台・石巻からの漂流人はみな船乗りで、日本の掟として他国への渡海は禁

止されているので、日本人はみな彼等のように無学な者たちだと思っ
ていたらしいのです。日本人との談話とちがい、異国の者たちの話は
たいへん面白く興味深いものでした。

(中略)

一、ロシア人たちは松前におりましたが、このたび御返しときまり
ましたので、八月十七日函館へ移され、私たちも引き移りました。

九月十七日迎えのロシア船シアナ号が、函館に着きました。船の長
さは十七、八間、幅は五、六間、石火矢（艦砲のことカ）数挺を備え
ています。帆柱三本、帆の枚数は各十三枚ずつのようです（後略）

伊能忠敬がこの足立左内の書簡を写したのは、多分文化十一年の二
月頃と思われる。この頃忠敬は最後の九州測量の帰りで大坂を通り、
ここで間重富に会ったと推定される。間はずっと、貧しくて体の弱い
麻田立達の面倒をみてきたから、この書簡の実物が写しを持っていた
ことは確実である。二月二十八日京都に着いた日の『測量日記』には、
夜にはいって、大坂の間重富から使いの者が手紙を届けてきたことを
記しているの、このときかもしれない。

文化元年父の後を継いだ天文方高橋景保は、学問だけでなく政治力
にも長けていた。ロシアの大物を捕らえて騒然としている幕閣にたい
し、若年寄堀田正敦を通じて、足立左内と長崎通詞・馬場佐十郎を松
前に送るよう要請したのは、彼である。

ゴロウニンの『日本俘虜実記』によれば、「ちようどそのころ、日
本の学者と通詞（足立左内と馬場佐十郎）が毎日欠かさず我々のもと
に通うようになった。我々は前者を学士院会員と呼んだ。彼が学士院
に似た学術協会の一員だったからである。もう一人の方は、オランダ
通詞と呼んでいた。この通詞は記憶力抜群で、これまで収録されたロ
シア語辞典の総点検を始め、それらの改訂と補足を終えた。彼のロシ

ア語は急速に上達した。

また学士院会員はロシアではどんな暦法を用いているかと尋ねたの
で、まだ旧暦なのだと答えると、オランダなどの新暦と旧暦の違いを
説明してくれと言った。私の説明を聞いたあと彼は、新暦もまだ完全
なものでなく、ある年代をへると誤差が二四時間になると言った。そ
れで私は、彼がなんでも知っていて、私の理解度を試すために質問し
たのだということが分かった」とあり、ゴロウニンは二人の学力に対
し、このあとにも最高の賛辞を連ねている。

伊能忠敬が帰心矢のごとき文化十一年、この手紙を写したことに、
私は敬意を表したい。このような外国情報の自筆写しがもう一通ある
のだが、彼には日本の未来が、ある程度見えていたのではなからうか。
少なくとも、ただ黙々と測る人だけではなかった。

前置きばかりで、この号は終わってしまったが、伊能忠敬がどのよ
うな国際的・国内的ネットの中に位置していたかを知っていたきた
いと思つて、つい本題から逸れてしまった。（この項つづく）

参考文献

- ※ 頼祺一編『日本の近世13』中央公論社
- ※ 大谷亮吉『伊能忠敬』
- ※ 渡辺敏夫『天文暦学史上に於ける間重富とその一家』
- ※ 大石慎三郎・市村佑一『鎖国―ゆるやかな情報革命』講談社
- ※ 『伊能忠敬書簡』B―（世田谷伊能家文書）
- ※ 『高橋景保書簡』八四―一七 伊能忠敬記念館蔵
- ※ W・ゴロウニン、徳力真太郎訳『日本俘虜実記』講談社
- ※ 『国史大辞典』吉川弘文館

伊能家文書紹介十二 その二

臼杵あたり

伊能 陽子

九州測量の後を追いつ、こぼれ落ちていた史料を拾いながら平戸、天草、鹿兒島、日向と廻り今回は臼杵へたどりついた。

史料 一

A四二 李嶋

(世田谷伊能家文書)

覚

李嶋の儀 前々より臼杵
御領 佐伯御領 当領
三ヶ所 出会の嶋にて
三ヶ所より出会 蒨敷
海草等取来 漁事をも
仕来申候 先年も少々
申分の儀も 御座候由の所
何方ニも 相片付不申
矢張 出会の嶋にて
是迄 無故障 三ヶ所
相寄合 漁業等仕 蒨敷
海草も取来 近來 何そ
申分無 御座候
右の通ニ御座候 以上

細川越中守内

岡松作右衛門

二月

「李嶋のことは前々から臼杵御領、佐伯御領、当領と三ヶ所の出会の嶋であつて、三ヶ所から出会ひ蒨敷、海草などを取り、漁も致して参りました。先年も、少々の申し分は御座いましたようですが、どちらにも片付きませんで、やはり出会ひの嶋であつてこれまで差し障りもなく、三ヶ所寄り合つて漁業などいたし、蒨敷や海草も取り、近ごろは何も問題はございません。以上です。

細川越中守内

二月

岡松作右衛門

※蒨敷

山野の草、樹木の茎葉を緑のままで水田や畑に敷き込むこと、またその材料。かつて地力維持の重要な手段の一つであつた。

史料 二

A二五

上使覚書の書き抜き

(世田谷伊能家文書)

寛文七未年浦廻

上使覚書の内書抜

大坂御船奉行

高林又兵衛様

上使

江戸より

向井八郎兵衛様

浦々の絵図 仕出候様ニと 御兩人就被

仰付候 早速 相調 臼杵江御着の時
差上の其絵図ニ 向嶋書記申候

浦上使御記録の写書抜

深江村 長目村の間ニ 向嶋 御書記
有之事

「寛文七年、大坂の高林様、江戸の向井様ご兩人から海上の絵図を差し出すようにとご命令があり、早速調べて臼杵へお着きの時差し上げましたその絵図に向嶋を書き入れました。

(浦上使御記録の写書抜)

深江村と長目村の間に向嶋が書き入れてあります」

この二つの書き付けにある本嶋も向嶋も、現在の地図の上では見つかからない。「無垢島」というのがそれに当たるのだろうか。地元の方に尋ねてみたい。寛文七年(一六六七)とは古い資料だと思ったらまだ上があった。次の文書は、何と関ヶ原合戦の翌年、一六〇一年の記録ではないか。人名、地名の調査が大変なことになってしまった。

史料 三

A五一 領地引き渡しのこと

(世田谷伊能家文書)

慶長六年辛丑

六月以貞通領地大佐井佐賀関
辺賜加藤清正是依清正請訟也
又佐伯庄内保戸嶋赤河内床木
辺同雖領地賜毛利伊勢守因而
為此等代地以戸次莊十九ヶ村賜

貞通也佐賀関邊代官古田五郎
兵衛佐伯保戸嶋代官石丸權兵
衛重光出会加藤毛利從臣引
渡其郷村也曾二月貞通賜佐
賀関代官所証文於古田其文
曰

覚 代官 古田五郎兵衛

一九百六拾五石五計三舁六合五夕

佐賀関七ヶ村

慶長六 二月二十六日 印

同年七月大久保十兵衛長安
受片桐且元来礼之旨執之達
家康公公聞之遂詮議正其事
実於大分郡内以六千石賜典通
加之以去年賦税米也其地代官
者府内城主早川主馬頭長教也
由是且元長安贈於書早川令
渡右件之地及去年賦税米於
以典通遺從臣土屋聡左衛門
貞直於植田莊受其采地則
以貞直為其地代官

この文書は、大分の臼杵藩政資料によると、臼杵城主稲葉貞通・典通父子の来歴に関するものと思われる。(武蔵高校猪尾先生ご教示)

加藤清正、毛利伊勢守（輝元）、大久保十兵衛長安、あるいは片桐且元など、歴史小説の登場人物として馴染みがあるし、地名の方も幾つかは不明だが、およその位置は地図の上に見つけることが出来た。字面を追っていくと、なんとなくわかったような気がするが、私の貧しい理解力ではとても正しく読み解けず、ここはどなたかの力をお借りしたほうがよいと判断した。ぜひ、ご協力を頂きたい。

いつもの事ながら、「記録」ということを考える。この場合も、我が領地であることの証明に、二百年も以前の記録が引き出され、一役買ったのだろう。そして更に二百年経った現在も、一つの資料として存在している。これらの文書と向き合っているとき、誰かが記録し、誰かが保存し、そして誰かが伝えていくその積み重ねの中に、時が流れていることを実感するのは、確かである。

伊能家には「記録魔」の先祖が多い。忠敬の四代前の景利は特に沢山の記録を残している。そして景利の文中には、その三代前の景満によって記録の重要さを知ったと書き残されている。

忠敬が村政にあたって、先祖の記録に教えられ、助けられたことは随分大きかったと思う。そしてまた忠敬が、「記録魔」になり膨大な「測量日記」その他の記録を残している。

余談になるが、母の多嘉子の記録もたいしたもの、大正十年結婚以来の日記が、亡くなる前日迄の六〇冊余り残されており、質量ともに、その重さに押し潰されそうである。激動の時代の庶民生活が記されており、貴重な資料の一つと思うが、まだその記録は生かせずに、大切に保存しているだけである。

枇榔嶋余聞

十八号掲載の「枇榔嶋」を地図の中で捜している時のこと、いつものように先ず現地にと日向市観光協会に問い合わせたものだ。

「ピロウジマ？ 昔のこと？ ああそれなら詳しい方がおいでです」

あたたい応対は、八代・つく嶋のときを思い出させた。勢いを得て、紹介された原田さんに電話をした。

「枇榔嶋は美女ヶ島とも言ってますね、神武天皇のころ…」勿論、昔の話が知りたいと言った私の念頭には江戸時代があったのだが、一気に神代にさかのぼってしまった答えを受けて、はっとした。そうだ日向の国は神代の国だった。江戸時代なんて、ほんの少し前のことなのだと、お国ぶりがうかがえて面白いなと思いつつも、現在の枇榔嶋には枇榔の樹はないこと、神社らしきところもなく、お祭りもないと聞かされて、がっかりしたのだった。

けれど伊能忠敬に関する事を調べていると伝えると、延岡市の「夕刊デイリー」に、ずっと以前から連載されているという『御用の旗が日向路をゆく』のことを教えて下さった。一本の電話から、また思いがけない出会いが生まれた。私がいつもため息をつきつつ原稿に追い回されながらも、何とかここまで来られたのは、こんな出会いがあるからかもしれない。そして「夕刊デイリー」編集委員の秋山栄雄さん（七七才）との交流が始まった。

失礼ながら秋山さんを紹介するのには、ご自身のお手紙が一番のよいな気がして、ご了承を得て使わせて頂いた。十年以上も前から連載を続けていらっしゃる秋山さんにはただただ敬服し、測量隊が全国を廻った足跡が、このようにしっかりと残されていることに感激をした。まだ何処かでも、このように発見出来るかも知れないと期待も膨む。

伊能陽子様

立春。南の国にも寒波がきました。

風が過ぎれば「あたたか」です。

『伊能忠敬研究』ありがとうございます。

一号からじっくり見たいと思っています。

『御用の旗が日向道に行く』は、昭和六三年の四月一日から 始めました。いま第五部です。

香取館長さん時代に行き 佐久間館長さんのころにも記念館に行き 一昨年佐原の市内をまわってみました。

資料は 宮崎県総合博物館と一緒に調べたガリ版の「伊能忠敬測量日記」

からです。このときの 沢武人(博物館

学芸課長)は 私の親友で

「いつか 伊能さんの道をたどろうや」と

いつていたのですが 故人になりました。

ちょうど 伊能さんと同年ぐらいになりましたので書きはじめたのです。

「測量日記」をたどりながら、周辺の

歴史を見つめるという点も加えました。

これは新聞の営業面にも役に立ちますので。

第一部は 八六三回で平成三年十月まで

第二部が 三八一回 平成四年三月二日から

平成六年二月五日まで

番外(天領 富高を中心に)二五回

平成四年一月二日から二月一九日

第三部 三七一回 平成六年二月八日から平成七年二月三十日

第四部 三六六回 平成八年一月五日から平成九年二月三十日

第五部 平成十年一月六日から現在です。

第五部は伊能隊と坂部班が 大分県森町で合流するまでにしたいと思っています。このあと 第六部として 坂部貞兵衛の死や隊員のこと 地図づくり 三角点などをやるつもりですが…

(後略)

最後まで秋山さんにおんぶで申し訳ないが、枇榔島の伝説も転載させて頂く。

(前略) この島は、地元では単に『びろう』と呼んでいる。美女ヶ島といったのがなまったのだという伝説があり、神武天皇の船団航海の神話が秘められている。海に点在する島には、貴重な伝説があり、古い習俗が残っている。神武船団が、日向市の美々津港を出て大和地方に向かう途中、細島沖で海鳥の群れ飛ぶ島を見て『鳥辺島』と言ったことから「飛島」とか「トベ島」という名の小島もある。美女ヶ島は、航路のじゃまをするクジラの化身した美女のいるところといい、そのクジラを追い払った鏝を納めた島を鏝島といい、細島となったともいう。クジラの化身した美女がいた島なので美女ヶ島といい、やがて「びじょ」がなまって「びろう」となり「枇榔」となったという。地名を追ってみるのも、民俗的な研究としては興味があることだと思う。島には、ロマンがあり、調べねばならぬ多くの問題を含んでいる。「海南小記」は、よき指針である。柳田翁は、『小さな詠嘆の記録に過ぎない』といっているが…。

(「ふるさと文学考 第五回 柳田国男」夕刊デイリーより)

『伊能豊秋日記』(一)

小島 一仁

佐原の古文書学習会

私が古文書を読めるようになり、その方面のしごとにも少しばかりタッチできるようになったのは、地元佐原の人たちと共に古文書学習会を続けてきたおかげである。この学習会は、一九七四年の十月からはじめたのだが、そのときには、私をふくめて「古文書を読める」といえるような人は誰もいなかった。退職公務員や会社員・商店主・農民・主婦・歴史や書道の教師など十数人の歴史愛好者たちが、古文書を読みたいということで集まったのである。毎月二回づつ集まることにした。だが、どれだけやれるのか、どれほど続くのか、まことに心細い次第であった。

ところが、それが今年で二五年目に入り、十月が来ると六〇〇回の学習会をつみかさねることになる。解読力にいくらか自信が持てるようになると、会の名で、史料の自費出版をするようになった。

一九八二年から、『先年より市場留書』『佐原邑河岸一件』『問屋一件御吟味之訳控』(以上伊能家所蔵)、『航海日記』(地元出身の平野新蔵が幕末の遣米使節に随行して世界一周をした記録)などをつづけて出した。また、一九九五年に佐原市史編さん室が開設され、そ

の最初のしごととして、伊能景利(忠敬の妻ミチの祖父)の記録した『部冊帳』(前後巻合計二十七冊)が『佐原市史資料篇・別篇』(三冊)として出版されたが、その解読筆写は、すべて、私たち古文書学習会会員の手によって行うことができた。

このように、私たちの学習会が長期にわたって続けられ、一応の成果をあげることができたことについては、いくつかの理由が考えられるが、最大の理由は、伊能家所蔵の古文書・古記録を自由に利用させていただくことができたことによる。これによって、私たちは毎回豊富な資料に恵まれ、充実した学習を続けることができたのである。

この稿では、私たちが学習会で読んだ文書・記録の中から、忠敬研究にとって重要と思われる史料をえらんで紹介していきたいと思う。

『豊秋日記』“発見”

“佐原時代”の伊能忠敬に直接関係する史料で、まとまったものとしては、文化財に指定されている『奥州紀行』『寛政五年癸丑三月旅行記』(関西旅行記)のほかに、『家牒』『旌門金鏡類録』『伊能豊秋日記』および『佐原邑河岸一件』とその下書の『佐原村川岸運送相究候一件』などの記録がある。このうち、『河岸一件』とその下書以外は、いずれも一九一七年刊の大谷亮吉氏の大著『伊能忠敬』に引用されているので、その存在は早くから知られていたが、大谷氏以後は、戦後に至るまで研究目的で実際にそれらの史料に接した人はいなかったと思われる。ところが幸いにも、私は故伊能多

嘉さんの御好意により、一九五五年に、それらの実物を手にとる機会を与えられたのである。

はじめて伊能家の土蔵に入ったとき、『家牒』と『金鏡類録』はすぐに見つかった。それらは、未知の記録であった『部冊帳』『伊能景利日記』『千代之古見知』などと共に、立派に装幀されて、桐箱におさめられていたからである。だが、『豊秋日記』はなかなか見つからなかった。大きな長持の中に収蔵されていたたぐさんの記録類を一冊づつたんねんに調べていったが、『豊秋日記』というのには出会わなかった。これは、ことによると、分家の豊秋家の方にあるのではないかと問い合わせてみたが、そちらにもないということだった。しかし、何回か土蔵に通ううちに、ついに、それを「発見」することができた。長持の底の方から、小型の粗末な帳面が一〇冊ほど細引でくくられているのが出てきた。何げなく、二、三冊拾い読みしていくうちに「これが『豊秋日記』だ!」と気がついたのである。私の頭の中に先入観となっていた「立派な記録」のイメージとは、かなりかけはなれたものであった。しかし、この「発見」のときの嬉しさは、今もって忘れることができない。

七郎右衛門豊秋

佐原市在住の史家香取五郎さんの調査によると、伊能豊秋家は、佐原伊能本家（三郎右衛門・忠敬家）の二代目景常の末男景忠を祖とし、豊秋はその五代目にあたるといふ。但し、『金鏡類録』では四代目と記している。豊秋は、はじめ通称を幸左衛門といったが、宝暦八年（一七五八）五月、佐原村本宿組の名主役に就いたとき七

郎右衛門と改めた。生年は不明であるが、明和九年（一七七二）五月二三日に没している。法号は亮尚院蓮體浄性信士。没年齢も不明であるが、妻が文化一三年（一八一六）八月に八一歳で没しているので、豊秋は四十歳くらいで死去したのではないかと思われる。そうすると、彼は忠敬より一三、四歳年長であり、名主役については、二五、六歳であったと考えてよさそうである。

伊能本家では、元文元年（一七三六）に八代目景慶が二十歳の若さで死去して以後不幸続きであったが、豊秋が名主となる前年、宝暦七年（一七五七）にまた不幸があった。九代目長由の遺子ミチの聲に迎えた景茂が死去したのである。ミチは、夫の死後に男児を生んだ。ミチの母タミは健在であったが、本家には、使用人を除くと男手がなくなった。そのため、豊秋が、本家の経営について何かと相談にのり、ミチの二度目の聲として忠敬を迎えるについても骨折った。そして、忠敬入夫後も、しばらくの間は忠敬を「扶補」して、本家の面倒をみたのである。

豊秋の日記は、宝暦六年（一七五六）から明和七年（一七七〇）までであるが、宝暦七年、一三年、明和三年の分は欠けている。『伊能豊秋日記』という表題はつけられておらず、各冊とも、表紙に年号と『日記留帳』又は『日記』と記されているだけである。しかし、この記録は、忠敬在世中に編集されたと思われる『旌門金鏡類録』に『豊秋日記』として引用されている。そのため、大谷亮吉氏もこれを『伊能豊秋日記』と記したのである。

『伊能豊秋日記』は、『旌門金鏡類録』や『伊能景利日記』のように整然と編集・記述されたものではない。しかし、豊秋個人の生活のほか、佐原村とその近郷におこった事件や祭礼などの行事につ

宝曆八年つちのへ寅

正月朔日大つちのへ子日和吉

當年流氷は流氷は月親に

けいふ流氷は流氷は月親に

二日日和上三日日和吉に日

日和吉又日日和吉といふに日

とふれふと日日和吉七日日

和吉八日日和吉九日吉に

九日日和吉三箇たつと新なる

中宿組百姓水吞米五拾八俵

合り仕分米五拾八俵の八を

合り仕分米五拾八俵の八を

いて、見たこと聞いたこと思ったことを、ありのままに記していて、極めて興味深い。豊秋の息吹きがそのまま伝わってくるようなところも少なくない。本稿では、忠敬に関することだけを、二、三、ぬき出して紹介してみよう。

賀さがし

宝曆八年（一七五八）、忠敬の伊能家入夫の年より四年前のことである。その正月に、次のような記事が見える。

九日、日和吉、三郎右衛門殿所ニ而

本宿組百姓水吞米壹升宛

合力仕候、米五拾八俵程

前年の五月、利根川下流域は「日光水」のために大満水となった。佐原村附近は、現地で雨がほとんど降らなくても、利根川上流の日光方面で豪雨があると、しばしば、洪水に見舞われたのである。この「日光水」で凶年となったため、伊能三郎右衛門家では、佐原村本宿の百姓水吞に対して、一軒当り米一斗づつ、合計米五八俵程を施与したというのである。伝説では、忠敬が入夫したころ、三郎右衛門家は没落に瀕していたともいわれているが、それほど家産が傾いていたとは考えられない。「米五拾八俵」というのは大した額ではないが、前年に賀が死去したばかりなのに、これだけの施与を行っていたのであり、三郎右衛門家は、むかしながらの名家・資産家としての面目を保っていたのである。

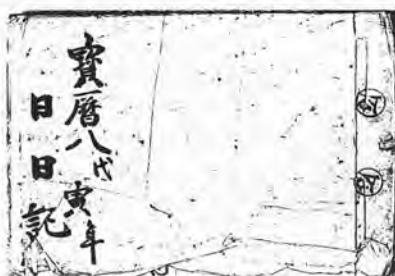
掲載文書語句解説

- ・「朔日」(ついたち)
- ・「日和吉」(ひよりよし) 好天氣
- ・「当年諸礼共法度、親類計り」
(とうねんしよれいとものはつと、しんるいばかり)
 今年(今年)は祭礼・年礼等の諸礼は禁止、年礼は親類だけに限るといふのであろう。当時佐原村は天領であったが、この「法度」は代官からの通達ではなく、村役所から自粛の意味で出されたものである。
- ・「金田清九郎一番ニ参申候」
 金田清九郎が一番はじめに年礼に來た。
- ・「合力」(こうりき)
 力を合せて助けること。金品を施与して貧窮者を助けること。

宝曆八つちのへ寅
 正月朔日大つちのへ子、日和吉
 当年諸礼共法度ニ付、親類
 計り、金田清九郎一番ニ参申候
 二日和上、三日和吉、四日
 日和吉、五日日吉上、小見川木之内
 年礼ニ参ル、六日和吉、七日日
 和吉、八日和吉、九ツ時じしん
 九日和吉、三郎右衛門殿所ニ而
 本宿組百姓水吞米老斗宛
 合力仕候、米五拾八表程、八ヶ市は
 金三昨夜死去、そうく今夕方



裏表紙



豊秋日記表紙

さて、前述したように、伊能ミチの先夫が死去したのは宝曆七年であったが、忠敬がミチの後配として伊能家にはいったのは宝曆十二年(一七六二)である。伊能家では、新しい贅をなるべく早く見つけたかったはずなのに、どうして五年もかかってしまったのであろうか。

『豊秋日記』には、宝曆十一年までは、贅さがしに関することは、ほとんど出てこない。しかし、『金鏡類録』を見ると、この間にも、豊秋は、その件について、かなり熱心に動いていたことがわかる。豊秋は、タミヤミチのたよりになるようにと、タミの実家である南中村(香取郡多古町南中)の平山家の中から養子を迎えようとし、二、三の候補者を見つけて交渉に当たった。しかし、どれもまとまらなかった。その主な理由は信仰上の問題にあった。南中村近辺は、むかしから日蓮宗の信仰の強いところであり、中でも、平山家は篤信の家として知られていた。その家でそだったタミは、真言宗の伊能家に入ってから信仰を変えぬばかりか、伊能家の女性たちに対して日蓮信仰を広めようとした。夫長由の兄で隠居していた昌雄はこれを怒った。そして、長由が自分より先に死去したのを機会に、タミとミチを、一時南中村の実家へ返すと共に、伊能家内部で日蓮宗を信仰することを厳禁した。豊秋が贅さがしをはじめたとき、昌雄はすでに死去していたが、右のような事情があったため、豊秋は、平山家から養子を迎えるにあたって、当人が真言宗に宗旨変えをすることを条件とした。だが、そのことは、いつも、相手に拒否されてしまったのである。

(以下次号)

歴史のなかの伊能忠敬 その四

草圭記 閉塞系と開放系の相克

芳賀 啓

実験考古学が称えられ、実践され始めてから三十年は経った。当初は胡散臭い素人方法論として、とくにアカデミズムでは冷ややかに遇するのが大勢だったが、その後徐々に学校教育の現場などで歓迎され、あちこちで盛んにその方法が採り入れられるようになった。考古学には土器形式の分類と年代比定を柱とした学問的なヒエラルキーがあり、その王道を外れたものはあまり相手にされなかったのだ。考古学は歴史学の一分野だが実験歴史学というものはない。多少似た語感があるのは、実証主義歴史学、いわゆる実証史学だが、これは実態としては文書を扱うなかで歴史事象を証明していく、文献史学の一である。そこでこの主役は、文字を媒介とした記憶と理解そして判断であって、身体的知や実感は背景に追いやられる。しかし歴史あるいは過去が、単なる旧懐や教訓譚、物語ないし共同体の規範言語としてでなく、現代に生きる私たちの眼前に、つまり未来に、切実なりアリティをもって浮上してくるのは、浪漫や緻密化し定式化された方法論からではなく、実際の危機とそれに対応した身体の回路を通してなのである。

*

*

ロビンソン・クルーソーのフライデーのエピソードを出すまでもなく、明治維新以来日本においても靴を履くことが文明人の証明となった。しかし、モンスーン・アジアに生きる我々にとっては、靴は実は「親の仇」以上のもののなのだ。

昨今では、エアコンディショナーが家庭にまで入りこみ、我々が直

接寒暖にさらされる機会は減少した、しかし通勤途上や、とりわけ外交業務を専らとする人々にあつては、閉塞性の靴の害を集中して体験している。何故に女性にはサンダル形式の靴佩用が許容され、男にはそれが許されないのか？ 甲殻様の洋靴は、文明開化期にまず、兵士と官吏の需要品としてもたらされた。そうして、社会の保衛―攻撃システムのジェンダーを通じて機能している以上、男の足は蒸れて窒息しその不快は密かに背骨を遡って攻撃的な感情を配給する。しかし一方で近代的生活様式に慣れきった日本人が、世紀末においても欧米人のような居間でも靴を履く生活を探り得ていないのは、一〇〇年や二〇〇年の「近代化」でも変わりようのない理由があるからだ。古代ローマン・ロードは、基本的には革のサンダルで踏み固められたのではなかったか。開放系の履物に代って、厚い皮革製品の閉塞系履物が今日世界の主流となったのは、文明枢軸の北方移動と無関係ではない。日本においては「理想の靴は、靴を履かないこと」という逆説すら成立する余地がある。そもそも北極から赤道まで、岩場・草地・水場からコンクリートまで、雨雪だまりから表面の融けかけたアスファルト道路まで、どこでも通用する汎用靴は存在し得ない。メーカーもユーザーも、形態や材質ばかりに捕われているかぎり「我が輩は、ウォーカーである。今だ満足といえるウォーキングシューズを、手に入れない」（奥村純「あるけあるけ」第四一三号）という永劫希求状態に置かれるのも当然だろう。「自然」は人間の身体を対象とし、あるいは人間の身体を通じて叛乱する。

*

*

去る四月三日、筆者は「伊能ウォーク」に参加して、青森県五戸町役場から八戸市役所まで、約二十キロメートルを念願の和装草鞋で歩く「実験」の機会を得た。八戸到着後、市内の書店で発売されたばか

りの石川英輔・田中優子著『大江戸生活体験事情』(一九九九年三月)を偶々手にし、そこで提唱されている「体験江戸学」が筆者の唱える「実験史学」と相似することに感心したのだったが、その記述のなかで履物についてはただ下駄に言及されているのみであった。

下駄は中世においては洗面や水場での使用が専らで、歩行に盛んに使われ出したのは家内工業の発達する江戸中期以降といわれる。これに対して、「草鞋」は鞋が革偏であることが示すように、元来は閉塞型の「くつ」の一種で、「草履」とともに古代中国では植物繊維を素材としたものを指し、一説では奈良時代にもたらされた貴族用の雪靴のことであったという。これが平安末期に改良されて通気性のある鼻緒式に変化し、なかでも長時間労働や遠距離移動には草鞋が一般的に使用されるようになった。伊能測量隊のスタイルが草鞋履きだったことは疑問の余地がない。しかし、右外股過剰に踏み出された草鞋の裏が目立つ「伊能ウォーク」の漫画絵の草鞋紐の掛方は甚だ疑問であった。

折角の「伊能ウォーク」なのだから、それ相応の服装をして歩く人がいてもいいのだがと、歩行中それとなく話を聞くと、確かに虚無僧姿の一日参加もあった由。草鞋履きで歩き通すことを考えた向きもあったが、一足約千円の草鞋で、一日複数足以上の替えが必要として、一カ月で数万円以上。とても間尺に合わないという結論となったという。筆者のいでたちは、草鞋以外は、薄地の野袴(かるさん)の上下に竹笠を付けた竹籠を背負い、小物袋を携えるというもので、とりわけ雪混じりの雨の降った前夜は笠の効用が遺憾なく発揮されたのだが、寒さは如何とも為しがたく、歩きながらも震えを抑えるのに苦労した。早朝、出発にあたって五戸町の役場の脇に立って話を聞いていたとき、白っぽい敷石の上に、寸時自分の足型がつくのを目にした。冬の窓ガ

ラスに顔を押し付けたときのように、足裏の呼吸が足袋と草鞋の間を通って出入りして、石を湿らせ温めていたのである。

ここまではまだよかった。皆について、見掛けだけは軽快に歩きはじめのうち、紐の結び方が曖昧だったこともあって、踵のほうから草鞋が外にずれていくのである。地元のお年寄りでも確信をもって結びを伝授する向きはいない。結びなおしてもズレは止まらない。多少きつくむずぶと今度は足首が苦しい。草鞋履きという深足袋を履いているので、裸足になっていないだけ。ズレた草鞋の角が当たる踵の土踏まず側が痛く、ついには痺れてくる。落伍するわけにはいかないので、とにかく引きずりながらも歩く、というていたらく。草鞋歩き自体の「感じ」は、コンクリートのブルサイドを裸足でべたべた歩くのを延々やっているようなもので、今日のようなゴムタイヤの機械を走らせるための装甲道路を緩衝部なしで長時間歩くのは、足腰背骨のためにはほとんど無謀であることが判然としたのである。また、碎石の稜は草鞋の底に突き刺さって面倒を惹起するので、そのような石の撒いてある場所に差し掛かったときは、足元に細心の注意を集中する必要もあった。しかしたしかに、サイクリング道路の路肩に辛うじて露出していた土や草の上を歩くときの大地の弾力性だけは、足裏に快く記憶することができた。かくて「実験」は一日止りとなったが、案に相違して二十キロはなんとか草鞋の替えを必要とせずに済んだ。ただし、伊能第一次測量の一日平均十里(四十キロ・旧軍一日の里程)にはほど遠いものがあった。次の課題は、開放式で底厚のある長時間歩行履物の探索だが、さて、いまはとりあえず、第一次実験結果の不体裁を棚上げして、「高温多湿の列島上に展開していた履物と衣服の発達史は、明治維新时期に一旦振出に戻されてしまったが、次世紀から再び開放系の理想を目指して前進をはじめ」と予言しておきたい。

伊能忠敬研究会 関西支部通信 No. 1

伊能忠敬研究会関西支部長 原田 照男

春の訪れも間近となって参りましたが皆様お元気のことと存じます。大変遅くなりましたが、

やっと写真が出来てきましたので、過日行われました支部例会などについてご報告致します。

ご案内の通り、去る一月十二日午後六時大阪城にほど近い以和貴荘に、渡辺一郎代表を始め平岡、中尾、坂本、荻原、松田、安達、吉井、原田の九名が参集しました。

まず始めに渡辺代表から「明日見ることになる伊能図は、寛政十二年提出伊能小図であろう事、これは第一次測量結果の始めての伊能小図で、全区間歩測で距離を測り天測値で補正したものである。ウォーク出発前に歩測だけで出来た数少



ない図が新しく発見され感慨深いものがあり、またウォークの進展につれて、まだ埋もれている多くの伊能事績（地図、文書）の発見を期待したい」次に伊能ウォークについて「歩くほうは歩け歩け協会にまかせて、当研究会員は専門家として、一般参加者とともに歩いてコミュニケーションをはかるとともに、当会が巡回展示物を用意して主要な地点で展示をするので、その説明員として機能して下さることを期待している」等のお話があり。

引き続き初対面の方が多かったので自己紹介から懇親会に移行して大いに歓談を尽くし、部屋に戻って有志の二次会となり夜の更けるのも忘れて語り明かしたことでした。

明けて十三日九時三〇分北浜にある開平小学校に、昨日のメンバーに藤原、三輪の両名が加わり、地図を所有する愛日教育会関係者立会いのもと国土地理院の長岡測図部長以下近畿地方測量部の方々と朝日、日経両新聞の記者の前に秘蔵の地図が繰り広げられた。開平小学校教頭俵谷先生の話では針穴が有るとの事であったが、これは認められず写本であることが判明し、昨夜の予想どおりの図であることが確認された。これらについては当日の朝日新聞大阪版夕刊のトップ記事で大きく取り上げられ皆様もご覧のことと思います。

これを伝え聞いた報道各社（NHK、時事、読売、毎日）も夕刻取材に訪れ、NHKでは当日夜のニュース番組の中で放映され、各新聞（地方紙も含む）の翌日の朝刊で報道されました。十一時頃に解散となり、渡辺代表のご希望で大阪城天守閣を見学し帰京されました。

当日のスナップ写真と例会ご参加の方には会計報告を同封致しますのでご承認下さい。

五月八日の総会には私所用のため出席できませんが、ご出席の方は代表ほかの方々によりしくお伝え下さい。

ご寄付御礼

伊能教室の準備その他で物品費が必要ですので、若干の寄付をお願いしましたが、多数の方々から御芳志をいただきました。厚く御礼申し上げます。一月二五日までの御芳名を前号に掲載しましたが、その後の御芳名は左のとおりです。あわせまして、ほぼ予定額に達しました。御協力有り難うございました。

前号に御芳名を掲載した分(九九名 一五七〇)

その後の御芳名

古賀英稔、佐山安太郎、永野達代、本郷靖枝、北田明子、成家淑子、堀田希一、川口富太郎、野田茂生、藤田ヒサ子、藤 勝利、石嶋博行、前田孝子、神戸信和、原田照男、清水健宇、神保 誠、神保弘之、河井明子、小林 清、山川 清(会員外)、座間喜美、平岡佳子、朝岡洋子、松尾昌英、伊藤元彦(到着順、敬称略)

(今回分 二〇名 三〇〇 累計一一九名 一八七〇)

お知らせ

○伊能ウォーク

伊能ウォークは順調に進行しています。出発式には多数御参加いただきましたありがとうございます。市原、千倉、九十九里、銚子、水戸、高萩、いわき、仙台などで伊能忠敬教室が開かれました。各会場には手分けして、吉野敏、渡辺一郎・貞子、永野達代、長岡正利、佐久間達夫、安藤由紀子などの会員が出て展示の説明、講演などを行いました。特に高萩では、永野会員の尽力で、伊能ウォーク隊は長久保赤水の生誕地、墓所、住んだ家、隠居所を表敬訪問しました。顕彰会の方か

ら丁寧な説明をいただきました。いっぽう、渡辺は顕彰会の有志に講演し、あと懇親会を開いていただくなど、長久保赤水顕彰会と交流を深めることができました。また、高萩の伊能教室はNHKで全国放送され好評でした。

デイリー隊ウォーカーとしても、伊能陽子、窪谷悌二郎、土肥規男、村上昭三会員などをはじめ多数の方々に御参加をいただき御礼をもうしあげます。藤岡健夫、福田弘、安藤由紀子会員には本部隊宿舎に泊まり込んで激励をいただきました。河井明子会員は医師の御主人が押す車椅子で北茨城市役所に出迎え、本部隊宿舎に豪華な御料理など差し入れていただきました。

伊能忠敬と同業の測量設計業協会では、毎日交代で自分の車や会社の車を利用して随伴車二台を出していただいております。名刺を出して御挨拶すると、ほとんど社長とか役員さんです。この際、何らかの役割を果たすための御参加でしょう。大変うれしく感じています。

(渡辺)

○伊能ウォーク関連イベントを提案しましょう

伊能ウォークからめて、市町村、教育委員会、公民館、科学館、記念館、博物館、図書館などに伊能忠敬関連イベント(講演会、シンポジウム、展示会など)を提案しましょう。先方が乗り気なら、時期とか、ウォークの通過・宿泊に関係なく応援します。御連絡下さい。

○会員の水野滋さんが出版をされました。

経営技術研究会を主宰されている会員水野滋さんが「辞世」という本を編著されました。一一〇名の言葉を記して解説した本です。

『辞世』 経営技術研究会編著 (株)ぎょうせい 二六〇〇円

○国際地図学会誌に執筆

日本国際地図学会誌『地図』九九年春号に、渡辺一郎、伊藤栄子両名が「続・徳山毛利藩における伊能測量」と題して執筆しました。

NHKの「堂々日本史」でとりあげられた伊能隊に出された料理とか、測量支援に繰り出した船団の構成などが出ています。抜刷りを希望の方は、郵券同封、伊藤栄子あて御申し込み下さい。

○新さくら丸で伊能ウォークと伊能忠敬講座

会員・松浦睦夫氏が主宰する船旅会社「ゆたか倶楽部」では、新さくら丸を借り切って、日本の東西南北の先端を一八日で周回するクルージングを企画しています。船上で六回、伊能忠敬講座を開きます。渡辺代表理事が講師として乗り組みます。

伊能測量最北端のニシベツと、最南端の屋久島でウォーク大会を開きます。また、歩け歩け協会の指導員が乗り組んで、船上で一〇キロウォーキングをおこないます。市民スポーツ連盟公認のスタンプを押します。御興味のあるかたは「ゆたか倶楽部」03・5294・6261に御問い合わせ下さい。（料金一九万から八五万）

○出版案内

『伊能忠敬が歩いた日本』ちくま新書 渡辺一郎著（筑摩書房刊、定価六六〇円、二二〇頁）が六月中旬に刊行予定です。ポケットにはいる伊能忠敬の本です。

○朝日新聞千葉版に記事掲載

安藤由紀子、渡辺孝雄両氏が朝日新聞千葉県版に、伊能忠敬の記事を掲載しました。安藤八回、渡辺十一回です。御希望の方はコピー代と郵券封入して直接お願いして下さい。

○読売新聞大阪版夕刊に記事掲載

佐久間達夫氏が五回連載中です。関西地区のかたお目通し願います。

○伊能忠敬教室盛況

土地家屋調査士会の連合会が専用の車を用意し、各県の協会が運用して、伊能大図複製を持ち回り、主要地で地図展を開いています。伊能忠敬の展示パネル・写真も同時展示し伊能教室は盛況です。仙台では入場者八〇〇名と報じられています。

○盛岡で渡部健三会員が講演

盛岡で渡部会員が、日本歩け歩け協会、土地家屋調査士会の企画により、伊能忠敬教室の一環として講演されました。盛岡には斎藤会員も出席され盛況でした。

○講演会などのお知らせ

渡辺代表理事らの講演予定がつぎのとおりあります。変わった話もありませんが、御関心のある方は御来聴下さい。

六月二二日（土） 国際地図学会・伊能忠敬研究会共催

於 国土地理院「地図と測量の科学館」入場無料 一三・三〇

演題 「伊能図探究」 渡辺一郎

「明治初期における測量・地図作成と伊能図活用」

清水靖夫または長岡正利

企画展「伊能忠敬」 二〇万分一図に全測量ルート記入展示

六月一日より南浦和公民館で伊能忠敬講座四回

講師・渡辺一郎、入場無料。問い合わせ 南浦和公民館へ。

おねがい

●伊能ウォーク本部隊の皆さんに、テレフォンカードをプレゼントしたら、と主婦的発想による提案です。ふるさとコールの何回分かでもお手伝いできるかと、皆さんのお手許に眠っているテレカ——記念品、お土産、お返しなどの勿論未使用——を寄付していただき、本部隊の方々へ差し上げたいと思います。例会受付でお願いします。欠席の方はお送り下さっても結構です（送り先・156-0043 世田谷区松原4-11-18・伊能）。これからも長い旅が続きます。なつかしい声が明日の元気の素になることもあるでしょう。よろしくご協力をお願いします。

入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行っています。

- ① 本会報の発行 当面年四回。
- ② 例会の開催 講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。
- ③ その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

入会方法

住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記載の上、郵便振替にて年会費六千円を「郵便振替口座 〇〇一五〇・六・〇七二八六一〇 伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

●伊能忠敬研究会・ホームページ

URLは、<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

担当 大友正道

* 本誌の編集委員は次のとおりです（50音順）

安藤由紀子（元国会図書館憲政資料室）・伊能陽子（伊能家）・香取禮良（前佐原市教育委員会次長）・小島一仁（佐原市史編纂委員長）・齋藤仁（学習院女子短大）・佐久間達夫（元伊能記念館館長）・清水靖夫（立教高校教諭・法政大学講師）・芳賀啓（柏書房専務取締役編集長）・渡辺一郎（伊能日本図研究会代表・会社会長）

編集後記

●近時は本誌もお蔭様で大変充実した内容となり、一方で文字が多すぎるなどお叱りまで出かねない始末。しかしこれも「伊能ウォーク」同様、シルバーパワー（「老人力」よりも輝きがある）の為せる結果でしょう。小島先生の「伊能古文書教室」は、全くの初心者（シルバー予備軍）にも文書に向かう楽しさを手ほどきしていただきたいと始めました。ご期待ください。（啓）

●四月十七日早朝羽田を立ち、十一時三十分函館市役所に到着した伊能ウォーク本部隊を夫婦で出迎える。函館市民体育館の広いフロアでは、伊能図展が開かれていて市民が熱心に見ていた。

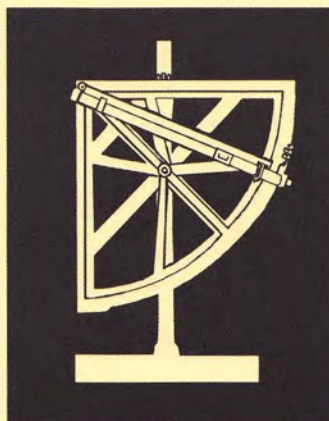
翌日は函館歩け歩け協会のワンデーマーチ、三五〇名の参加者と函館山の山頂までキツイ登り下りの十五キロ。何とか私も完歩でき、山頂の展望ハウスの壁面の忠敬の記念レリーフにも念願がなつて対面できた。

研究会会員の土肥氏も千葉から飛来、十九日の見送りウォークにも参加された。函館の皆さまの熱烈なご協力に敬意を表する。（伊能）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.19 Spring 1999



ESSAY

- 'Inoh Tadataka' from the Global Viewpoint NONOMURA Kunio 1

INOH-WALKING

- A Day of the Main Band WATANABE Ichiro 2
On the Route of Hitachi for the north KUBONOYA Tejiro 4
Rikuzen-Hamakaido FUKUDA Hiroyuki 6

MATERIALS

- From Visitors' Registers, Goto Shimpei INOH Hiroshi 9
The Case of Surveying Kaga Clan, 2 KAWASAKI Michiyo 10
Family Document 12
TAKAHASHI Yoshitoki & HAZAMA Shigetomi ANDO Yukiko 16
Around Usuki INOH Yoko 20
Reading Documents in Sawara, 1 KOJIMA Kazuhito 24

STUDY NOTES

- History and Inoh Tadataka, 4
Sokei-ki HAGA Hiraku 28

REPORT

- Kansai Branch, 1 HARADA Teruo 30

OTHER NEWS

- 33

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY